

書評

山内惠

不自然な母親と呼ばれたフェミニスト

シャーロット・パーキンス・ギルマンと新しい母性

(2008 東信堂 219P 3,200円+税)



松本悠子

本書は、19世紀末から20世紀はじめに活躍した思想家であるシャーロット・パーキンス・ギルマンの生涯とその思想を分析したものである。ギルマンは、既に、女性解放の思想家として著名であり、手元の複数の女性史の資料集にも『女性と経済』の一部が掲載され、女性の解放と男女の平等は、政治だけではなく、経済的依存関係を見直すことから始めるべきだと論じた思想家として紹介されている。本書はそのようなギルマンが、女性の経済的自立と「母性」の関係をどのように論じたかに焦点を当てたものである。

第1章では、第一波フェミニズムが参政権を獲得するまでの歴史を概観し、「近代家族」の公私の領域の確立のなかで、「家庭性」を政治力とした「ドメスティック・フェミニズム」の重要性を指摘する。しかし、このフェミニズム思想は夫の経済力に依存する限り「女」の領域を超えられないという矛盾を抱えており、ギルマンの生い立ちもまたこの矛盾にとらわれていた。結婚し、子供を産んだギルマン自身も「家庭性」の美德という圧迫のなかで苦しみ、「黄色い壁紙」を生み出したのであるが、この作品の中で、ギルマンは「家庭性の美德を体現した自己犠牲を求める母性」を「病んだ母性」として描いたのである。

第2章では、夫と別れ、最終的には子供を手放し、作家、詩人、講演家として生計を立てるギルマンが、政治活動や社会運動家との関わりの中から、『女性と経済』を著すまでが論じられている。『女性と経済』において、ギルマンは、女性の本来の性は男性に劣っていないが、女性が生存手段を男性に依存する「不自然な」歴史を歩むことになり、この「性による経済的

関係」という「不自然」な関係が制度、慣習化されたものが結婚制度だと指摘した。そのうえで、このような経済的関係から脱するために、家事労働の社会化をギルマンは提唱した。ギルマンのこのような議論は必ずしも彼女のオリジナルではないが、近代社会の根底としての家族制度そのものを批判しているところに著者は着目している。

さらに、著者は、ギルマンの思想のオリジナリティを、これまであまり注目されなかった「新しい母性」論に見た。ギルマンは、働く母親こそが理想の女性であると主張し、働く母親を人間として解放するにはどうすればよいかという難題に取り組んだのである。その答えとして、ギルマンは、母性の機能を「産み、育てる」機能と「教育する」機能とに分け、後者の機能は、科学的に教育する専門家に任せるべきだと論じ、集団保育をすすめた。しかし、この保育の社会化による母親の自立、「社会の奉仕者」への道は、当時の社会に受け入れられるものではなく、ギルマンは「不自然な母親」という烙印を押されたのである。

第3章では、ギルマンが編集した雑誌と三点のユートピア小説を考察し、家事労働から解放され、「人間」として目覚めた女性が仕事に従事し、子供たちが集団保育で理想の教育を受ける世界が、ギルマンの描くユートピアであると指摘した。しかし、このユートピアは多くの批判にさらされた。とりわけスウェーデンの社会思想家エレン・ケイは、セクシュアリティの主体としての女性、真摯な恋愛による結婚制度を提唱し、出産と子育てを神聖な女性の天職と考えていたため、ギルマンのような考えを「母性のかげらもない」

フェミニストとして非難した。このような批判に対し、ギルマンは、「母性」は個人のものではなく社会全体が担う義務であるとし、子育ての社会化を受け入れ、個人的な母性に執着しない「不自然」な母親を積極的に評価したのである。

第4章では、ギルマンのフェミニズム思想がどのように日本で受容されたかを、3人の論者を取り上げて論じている。まず、広汎な社会的活動に参加できる「国民」を育てることを日本の女子教育の目標としていた成瀬仁蔵は、ギルマンの共同保育論を実践しようと試み、「社会の奉仕者」としての母親を育てる必要性を訴え、『女性と経済』の翻訳をすすめた。成瀬が、彼の「良妻賢母」を育てるという考え方とギルマンの思想との矛盾に気づかずギルマンを受容したとしたならば、ギルマンも苦笑いするほかなかったであろうが、科学的な子育てや共同保育論に注目した成瀬を著者は評価していると思われる。いっぽう、日本の家父長制を批判した平塚らいてうは、エレン・ケイを支持し、家庭の外に出て経済的自立をすることだけが女性の解放ではないとギルマンを批判した。このような日本での批判に対し、著者は、「近代化」を推し進める日本では、「近代」との格闘を強いられたギルマンを理解できなかったのではないかと考察している。第三の論者である山川菊栄は、社会主義に根ざした議論の中で、ギルマンの議論における女性の経済的自立と家事労働の社会化構想を紹介するとともに、階級的視点の欠如を批判した。しかし、山川も、母性を重視する母性主義と男女の平等を論じる母権主義の二分法に陥ることによって、ギルマンの「新しい母性」の議論が受容できなかったと指摘している。

このように、本書は一貫して、男性原理に基づく「近代」フェミニズムの二分法、すなわち男性との「平等」か、あるいは女性としての特性に基づく母性の保護か、という二分法の枠組みを超えようとした思想家としてギルマンを位置づけている。特に著者は、ギルマンが母性を「社会」という公の「男の領域」に拡大することを目指した点を高く評価するのである。アメリカ女性史研究の主流が白人中産階級的女性運動をこの二分法で論じて来たことを考えると、本書は、ギルマンの「母性論」に着目して、アメリカフェミニズムの歴史研究に新しい視点を加えたといえよう。しかもギルマンの生涯とあわせて論じることによって、その思想の足取りが読むものに生き生きと伝わってくる。ま

た、「共和国の母」から始まって、これまでのアメリカフェミニズム思想の歴史をギルマンの思想と関連づけて紹介することによって、アメリカ女性史になじみのない人々にも読みやすい書物となっているのである。さらに、ギルマンのわが国での受容に関する議論は、日本のフェミニズムの歴史研究に貢献するとともに、いわゆる外来思想がどのように受容されて来たかという大きな問題提起ともなっている。

しかしながら、疑問がない訳ではない。最大の疑問は、本書で紹介されたギルマンの議論に男性がほとんど登場しないことを著者がどのように評価しているのか、必ずしも明確ではない点である。ギルマンのユートピア小説でも、男性は依然として男の領域で仕事をしているか、全く消去されるかである。家庭を解体するということは、男性を消去することなのであろうか。著者も指摘しているように、家事の社会化とは、移民やアフリカ系アメリカ人女性労働者に家事をさせることである。保育の社会化に関しては、プロというほか誰が担うのか明確な記述はない。しかし、理想の教育に男性の手を借りることはあっても、育児そのものを「男性の領域」に拡大することを想定していたのであろうか。著者の言うところの「社会」すなわち国家や自治体の関与を想定することによって、「母性」を「男性の領域」に拡大することを試みたと論じることができるかもしれない。しかし、ギルマンの議論に行政や政治についての具体的提言をみつけることはむずかしい。しかも、つい最近までの職種におけるジェンダーによる分離をみても明らかなように、たとえ「社会」が関与したとしても、家事の社会化と同様、実際には女性の共同作業になることは想像に難くない。

ギルマンが男性原理を批判し、「男性が造った世界」の転覆を試みたが失敗に終わったと著者は指摘しているが、果たして、ギルマンは「男性が造った世界」を転覆しようとしたのであろうか。確かに女性が人間として経済的自立を望むことは、家庭性を武器として参政権獲得を目指していた当時の女性運動の中であって、画期的であったことに異論はない。しかしながら、その自立が、他の女性によって支えられることを想定しているならば、しかも、ギルマンの論に階級的視点が欠如しているという指摘からも明らかなように、生活のために安い賃金で他の女性の下支えをしなければならぬ女性が想定されているという構造を考慮するならば、一部の女性が個人として分離された女性の領

域から脱出したとしても、社会全体のジェンダー構造に関して領域論を否定することは難しい。著者の分析によると、「ヒューマン=男性」を目指すことが母性を放棄することでしかないとするならば、新たな「女性による規範」によって「新しい母性」をつくり直すしかないという。しかし、出産は別として、子供を育てることが母性であるとする限り、個人で行うか女性の共同作業かという違いがあるものの、「新しい母性」といっても男性／女性の領域論から逃れるすべはないであろう。その意味で、ギルマンがどのように「近代」を超えようと格闘していたのか、もう少し分析がほしいところである。

このようなギルマンの視点を、移民や黒人女性労働者に対するギルマンのまなざし、あるいは優生学の信奉などととも、ギルマンといえどもその時代の思想の枠組みからでることができなかった「限界」と論じることでもできよう。しかし、現代社会にも通じる社会思想家としてのギルマンを考えるにあたり、「限界」を論じるだけではなく、ギルマンの女性解放論が社会全体のジェンダー構造の強固な枠組みをどのように変えようとしていたのか、知りたいところである。個々の男性のあり方やジェンダーに基づく社会構造の変革も含めて論じる可能性がギルマンの思想の中に残されているのかどうか、著者にお伺いしたい。

もとより評者は、ジェンダーを歴史の分析手段として重要であると考えているアメリカ史研究者であって、フェミニズムの研究者でもアメリカ女性史の専門家でもない。したがって、的外れの書評になっている可能性は大いにあり、その点ご容赦願いたい。本書を書評させていただく機会を与えられて、一人の女性の苦闘がどのように自らを解き放つ思想に結実するのか、そのプロセスを追体験することができ、あらためて思想史の面白さに気づくことができたことを感謝したい。

(まつもと・ゆうこ 中央大学教授)